

大分大学と大分県は、2021年度より「大分県地域共生社会の実現に向けた実務者ネットワーク会議構築事業」として、地域共生社会の実現に向けて、多世代交流や住民相互の支え合い活動の促進や、包括的支援体制を構築する市町村を支援する取組を開始しました。

今後、事業の一環として、大分大学福祉健康科学部の学生が多世代交流事業への取組を取材し、その内容を記事にして掲載したいと思います。

今回は、その第1回目として別府市の立命館アジア太平洋大学(APU)の学生が運営をしている子ども食堂「灯(ともしび)」へ取材にうかがいました。どうぞ、ご覧ください！

■多世代交流活動への取材#1 子ども食堂「灯(ともしび)」への取材

取材日：2022年11月6日(日)

文責：明德真愛子、矢野彩菜（福祉健康科学部社会福祉実践コース2年生）

■ 地元大学の学生が主体となり自治会や地域の協力を得て運営

11月6日(日)、別府市の立命館アジア太平洋大学(APU)の学生が運営をしている子ども食堂「灯(ともしび)」に、お手伝いスタッフとして参加しました。「灯」は、心がぼっと明るくなるような場所にしたい、学校という限られた場所ではスポットが当たらない人にも当たるような場所にしたい、子どもたちが自分の強みを生かしてみんなが明るくなれるようにと名付けられたそうです。会場は「亀川」の由来となった由緒ある場所で、生まれ育った人たちの幼少期の遊び場だそうです。当日のスタッフは、コアメンバー4名、ボランティア3名と自治会長を含む8名で、参加者は5歳～小学2年生の5人、保護者が公民館まで送り迎えしていました。

■ 遊びをつくりだす子どもたち

子どもたちと様々な遊びをすることで、大人になって忘れていた「子どもの視点」「楽しい、面白い」を再体験できました。

カードゲームや縄跳び、お絵かきなどの様々な遊びをする中、一番長い時間遊んだ遊びは「遺跡発掘」でした。子ども食堂兼公民館の外の亀の甲公園には水が抜かれた池があり、底にはたくさんの小石が敷き詰められています。一人のこどもが、その中から珍しい模様の石碑のかけらのようなものを発見すると、「こっちにまだあるかも」「こうやって見つけるよ」と探し方を教えあいながら、皆で石碑のかけらを探し続けました。しばらくすると、誰かが「公民館に飾ってある絵と遺跡が同じ柄だ」ということを発見し、それを見ながらくっつけてみると、数個がつながりました。子どもたちも私自身もすごく興奮して、「すごい！もっと見つけよう」とみんなで宝探しをしました。また、見つけたお金を洗ったり、遺跡の像を磨いたりして綺麗になるのが面白くて、「神様喜ぶね」とみんなで協力して掃除のような遊びもしました。子どもたちが見つけて作り出した遊びを一緒にすることがとても新鮮で楽しかったです。

そして、子どもたちと同じ目線に立つことが子どもとの関係づくりにおいて重要であると再認識しました。同時に、お互いの行動を見守って気持ちを察するだけでなく、できるだけお互いの気持ちを言語化することで、子どもと対等な関係づくりができるのではないかと思います。

■ 肯定する場、支えになる場、視野が広まる場、自分を表現できる場

当日参加して気がついたことは、灯が目指す「肯定する場、支えになる場、視野が広まる場、自分を表現できる場」に基づいたスタッフの行動と子どもの応答の様子です。

スタッフは子ども一人一人を気かけ、孤立しないようにみんなで遊べるように配慮していて、それが良い雰囲気につながっていました。また、スタッフ自身の価値観を押し付けたり、子どもの意見を正面から否定しないよう気を付けていました。遊びの時間は、決まったレクリエーションをするのではなく、対話したり見守る中で、子どもたちがやりたいことができるようになっていました。自由に過ごすことはリスクがつきものですが、けがに発展しないよう気を付けられ

ており、安全な環境と否定されないという安心感が、子どもたちがありのままの自分でいられるということにつながっていると感じました。

子どもたちは目の前にあるものから遊び方を考え、自分の気持ちが盛り上がる経験をすることや、「こうやって見つけるよ」「一緒にやろう」「すごい!」「楽しいね」と他の参加者やスタッフと交流していました。このような経験は、子どもの視野の広がりや自分を表現する機会になっていると感じました。

■ 生まれたてのサードプレイス

子どもたちが帰宅した後に、学生と会場を提供している自治会長さんとで「ふりかえり会」を開催し、目標の再確認をしました。自分と同じ学生が明確な目標をもって活動をしていて、地域に支えられながら「第三の居場所」が生まれていることを目の当たりにし、灯のように子どもたちにとってのサードプレイスが数多くある社会づくりに貢献したいと強く思いました。そのためにも、子どもたちと関われる機会に積極的に参加しようと考えています。

灯の活動は始まって1ヶ月ですが、地域から食材や寄付などが集まり、毎週日曜日に定期開催しています。活動を見守る自治会長は「呼びかけをしているが子どもを集めるのが難しい」とおっしゃっていて、興味があればぜひ一度「ともしび」に参加してほしいと思いました。

灯の一日

9:15- スタッフ集合、調理開始

9:30- 運営メンバーのみミーティング（時間帯確認、注意時効、役割確認）

9:45- スタッフ全体(運営メンバー、お手伝いスタッフ)のミーティング

10:00- OPEN・受付・遊びの時間

おはようと声をかけ、公民館の中と亀の甲公園を行き来しながら思い思いに遊び始める。

縄跳びでどちらが多く飛べるか競争、バドミントンを特別ルールで勝負、水を抜いた池の底で宝探しなど…

自治会の「わたがし機」をお借りして、わたがしのおやつタイム。

12:00- お昼ご飯

おにぎり・照り焼きチキン・なすび・味噌汁・柿で秋を感じるメニュー

全員でテーブルを囲み楽しく話をしながら完食

12:40- 遊びの時間

お絵描きや鬼ごっこ、午前中の続きで宝探しなど…

14:00- CLOSE 保護者のお迎え

「まだいたい」「まだ遊ぶ」とまだ帰りたくない様子

14:10- 片つけ、清掃、スタッフ全員でふりかえり会



灯の会場は亀の甲公園に面した中央二区自治会の公民館



水を抜いた池の底には砂利が敷き詰められ”宝”が眠っている



バトミントンを使った新しい遊びの説明をうける学生たち

参考：おおいた子ども食堂 HP より

「NPO 法人全国子ども食堂支援センター むすびえ」によると、子ども食堂の数は感染拡大前の 2018 年は 2286 ヶ所、2021 年時点で 6,000 ヶ所以上になります。2020 年度から 20% 余増と報告されています。

「大分県社会福祉協議会」によると、2022 年 11 月現在、県内の子ども食堂は 92 ヶ所、その半数以上が大分市と別府市に集中しています。子ども食堂のスケジュールは、お昼開催、夕方開催によっておおよそ以下のようになっています。

■多世代交流活動 子ども食堂取材 #2

2022年11月13日(日) 文責：田川明香里、松山孝太郎（福祉健康科学部社会福祉実践コース2年生）

別府市 子ども食堂「灯」

自治会長 渡辺彰さんへのインタビュー

■ 地域の発展と子ども食堂

灯の活動の場を提供している中央二区自治会の会長、渡辺さんは、地元亀川の発展を目指す町おこし活動の中で、地元の大学生と一緒に「灯」を継続しています。その契機は公民館の隣にオープンした学生主催の「おしゃべり喫茶」で、1年ほど交流を深め、子ども食堂「灯」を一緒に運営することになりました。

渡辺さんは学生の参加について、「年齢が近い学生が子どもに向き合うからこそ、子どもの気持ちに寄り添うことができる。子どもと学生が交流する中でお互いの良い面が出てくるのではないか」と話し、所属大学にこだわらず、大分の学生皆で活動できればと考えているそうです。灯の運営を1ヶ月見守る中で、学生と反省会で議論し、食事の質と子どもの確保という2つの課題を挙げていました。

まず食事については、「学生が食事を一から準備しているためどうしても子どもの好みに合わせることが難しく、子どもが喜ぶかを第一に考えて食事を改善していく必要がある」そうです。子どもの確保については、「現在の子ども6、7人程度の利用から、常に10人前後が利用する状態にしたいと考えており、学生らと学校や家庭を回ってパンフレットを配布し宣伝をしています。子どもの数が少なくなっているなかで、常に情報を流すことは重要だと強調されていました。

■ 開かれた居場所で感じる、あたたかい気持ち

この活動に参加する前の「子ども食堂」のイメージは、よく写真などで掲載されている「学生が子どもと食べたり遊んだりして楽しく過ごす」様子でした。しかし、現地で体験したのは写真に写っていない人々の支えや交流でした。

会場に到着した時、活動に参加してみたいという気持ちとは裏腹に、既に出来上がっているコミュニティに後から参加することに苦手意識のある私は、緊張していました。しかし、実際に参加してみると、みなさんから細やかな声かけや笑顔をたくさんいただき、ほっとしました。

一日の活動を通して見ると、会場を整えて学生の活動を見守る自治会長さん、会場に子どもを送り迎えする親御さん、さまざまな寄附をしてくださる地元の皆さん、私のような新しい参加者など、普段では関わることもない世代の方が集まり、何気ないことで笑ったり話したりしていました。特に、みなさんと一緒に食卓を囲み、会話を楽しみながらゆっくりと食事することで心身共にリラックスできました。最初に感じた緊張はいつのまにかほどけ、あたたかい気持ちになっていました。

■ 子ども食堂とは何か

ヒアリングを終えて、「子ども食堂」には様々な可能性があることを改めて感じました。「灯」では、地域の発展を考える大人たちが、子どもや学生たち中心とした居場所づくりを支えていました。そこは様々な人が関わる「未完成の場」であり、多世代交流の場であり、居心地の良いサードプレイスになっていました。新型コロナウイルスの流行により人との関わりが希薄化している現代の状況において、めったにない素晴らしい機会だと感じました。灯は「子ども食堂」の一つの形で、これからも変わっていくし、他にも色々な特徴を持った「子ども食堂」があるのだと思います。まずは「灯」の活動をより多くの方に知ってもらい、渡辺さんの思いがたくさんの学生に届くことに期待したいと思います。



コアメンバーとのコミュニケーションを大切にする渡部さん